聖なる星、天より下りて
暗き大地で種子となり
根付き、芽吹き、枝葉茂らせ
恵みもたらす大樹となりし

木探す者、この地に来たりて
木とは大樹と見つけたり
彼の一族、街を築き
優しき大樹を守らむとす

大樹と星、ひとつになりて
街に恵みをもたらしけるも

街の傷、大樹に及びて
その御体を傷つけたり

人々、深く大樹を憂い
街を守らむと固く誓ふ

大樹と人、手を取り合い
長き旅路を歩みゆく

ゆえにその名は《平和の街（ターナ）》と呼ばる

綺麗な赤髪をした少年は椅子に座って話を聞いている。こう書くと真面目なようだが、彼は頬杖をついて、頭が落ちるのを支えており、もう陥落寸前である。

「……ということでこの街は平和の街と言われるようになったんじゃ。おい、アル。アル！　アランダール！」

「……はっ、はい！　おじいさま！　ちゃんと聞いております！」

アルと呼ばれた少年は勢いよく頭を上げ、大きな声で返事をした。しかし、その頬にはくっきりと手の跡が付いていた。

「では質問じゃ。この街を儂が作ってから今年で何年になるか分かるか？」

「え？　えーと、じいちゃんが今年で二百歳だから……。百五十年！」

アルは祖父から質問を受け、必死に今まで聞いたことを思い出そうとしたが、聞いていないことは勿論出てこないわけで、頭を抱えてなんとか正解に近いと思われる数字をひねり出した。

「ばかもん！　百七十五年じゃ！　何度言ったら居眠りせずに話を聞けるようになるんじゃ」

アルが居眠りをするのは今回が初めてのことではないようで、祖父の怒りも大きく、呆れを通り越している。

「だって、こんなこと覚えても意味ないもん。それならそとの街を見た方がいいよ！」

アルは物心ついた時からこの家の敷地の中から外には出たことがない。そのため、外の街の様子を見ることが昔からの夢であった。例えるなら、商人の息子が父の行商に付いて行きたいとねだるようなものだが、彼らの一族はこの街の支配者である。いや、正確には守護者という立場だ。うかつに幼い者を外に出してしまうと誘拐や暗殺の危険が無いとも限らない。

「成人して酒を飲めるようになったらいくらでも外に出してやるわい。今はそれよりもこの街の歴史をしっかり理解することの方が重要じゃ」

アルの祖父はゆっくりと語り始めた。この街に住む人々なら子守唄として聞いているであろう、街の成り立ちを詠った詩にのせて。例によってこの言葉から。

「むかしむかし……」

むかしむかし、空から石が降ってきた。落ちたところから芽が出て木が生え、果実を実らせた。そこに木を探す一族が現れ、これこそ求めていた木だとそこに住むことに決めた。

その地の者にとってはよそ者の彼らの周りには、行き場を失った者や、旅人などが集まり。少しずつ、そしてある時を境に一気に発展した。その発展の理由はいくつかあり、そのうちの一つが神木の存在だった。この木は神木と呼ばれている通り、特別な力を持っている。年に一度実らせる果実を領主一族しか知らない製法で酒にすることで、定期的に飲めば不老不死

＊1＊

織りあげている布の最前線を、筬でたたくように整える。そのときに鳴る、どこかやわらかい機織の音。それがフィオの耳を、最初にふるわせた音だった。

生まれる前から母さんのお腹の中でずうっと聞かされ、太陽が東の空から昇るように、毎日この織布工房で鳴りつづけていた音――この十四年、彼女は言葉より機織の音で育てられたと言っても過言ではなかった。

ターナの北東に位置する、築一〇〇年ほどの織工地区。水場のある広場を囲って、煉瓦と石による二階だての工房が立ちならび、そこからは日々種々の生地や糸、刺繍などが生みだされている。

フィオは、そこの織布工房の一つで働く織子である。街の他の子供たちとは違って学校には通わず、その時間はここで毎日布を織って生活している。

今日も彼女は仕事の真っ最中だった。

緯糸を巻きつけた杼を、ぴんと張られた数千数百の経糸の間にすばやく渡す。そうしたら筬でたたいて、踏み木を踏んで、経糸の上下を切り替えて――と、こうした工程をずっと積み重ねていく。その前に綜絖へ経糸を一本一本通したりする機準備があることも含めば、織子の仕事とは色々な作業をひたすら繰り返すものなのだろうと、彼女は結論づけていた。

「ねえフィオ姉ちゃん、ちょっとわからないところがあるんだけど」

シャツの袖をつかまれて、フィオはふと現実に引き戻された。振り返ると、壁際の小さい織機で仕事をしていた二つ下のマルコが、金髪の下からこちらを見つめていた。

「こら、フィオは大事な収穫祭の生地を織っているのよ。それも御神木を飾るリボンの！　邪魔しちゃだめでしょ」

彼の隣にいた従姉のリアが、咎めるように声を飛ばした。

「だって、フィオ姉ちゃんはなんでもすごく上手なんだもん。もうずっと大人組の仕事してるし」

「たしかに。今回も、うちら年少組の中で収穫祭の仕事割り振られたの、フィオだけだもんなあ」

一番端っこにいた丸眼鏡のサーラも手を止めて、栗色の髪をひるがえし加わった。

織布工房の子供たちは、たいてい小さい頃から周りの織子の仕事を見て自然に技を学び、十歳を過ぎると年少組という見習いの立場になる。そして十五歳の成人を迎えたら、晴れて大人組――正真正銘の織子に昇格するのだ。

「うちらの方が四ヶ月お姉さんなのに、フィオはどんどん先に行っちゃうなあ。年少組に入ったのだって、こっちが一年早かったのにさあ」

「フィオは才能も練習量も別格だもの。私らはひたすら修行あ

正午の賑わう商店街。様々な色とにおいがあふれている。店先の商人達が品物の宣伝文句を絶え間なく謳(うた)いあげ、買いに来た客の方もしゃべる、しゃべる。西の空を仰ぎ見れば案外近くに神木のてっぺんを拝めるこの辺りは、富裕層街や、神木を囲う領主一族の館にも近い。つまりは、神木のお膝下、小売業の聖地というわけだ。

商品はもちろんのこと、人間の方もバラエティに富んでいる。おかげさまで、通りはトラブルの巣窟だ。客同士、客と商人の喧嘩から、スリやひったくり、白昼堂々商品をかすめとるやつまでいたりする。とにかく人が多いから、一たび何かあれば、てんやわんやの大騒ぎになる。――そんな時は、自警団の出番だ。

ターナの平和を守る警備組織、自警団。主に商店街や住宅街、宿場町をお節介なほど見回っていて、地区ごとに分担が決まっている。ここ、神木より東の商店エリアの担当は、赤の腕章をつけた集団だ。つい今しがた「ひったくりよー！」とどこかのご婦人が叫んだため、早速、五人ほど走ってきた。先頭を行く三十前後の男がさっと指示を出すと、二手に分かれてひったくり犯を追い詰めていく。小柄な女性団員が一人、犯人との距離を縮めるため、他の団員より前に出た。すると、犯人が刃物を取り出してめちゃくちゃに振り回しだしたではないか。ギャーギャー騒ぎだす群衆。女性団員の方もひるんでしまう。と、そこで、先ほど指示出しをした団員の男が、犯人の持つ刃物を華麗に避けてタックルをかました。犯人は派手に石畳を転がり、三人の団員が慌てて押さえにかかる。タックルをお見舞いした男の方はといえば、群衆に向かって拳を突き上げ、拍手喝采を浴びていた。小柄な女性団員は肩をすくめ、犯人の取り落とした刃物を拾う。

こうしてターナの治安は保たれているわけだが、

「おー、今日もリット氏は絶好調みたいだな。やつがいるかぎり、たいていの小悪党はこの辺りで悪さできないよ」

「そんな彼から目の敵にされてる私達って、やっぱりすごいんじゃない？」

「かもな」

狭い路地に怪しい人影が二つ。どちらも灰色のマントをまとい、一人は長身で頭巾を目深にかぶっており、もう一人は大きな帽子と顔の下半分を覆う布をつけている。

「クレスク、お店抜けてて大丈夫なの？」

「今ちょうど昼休憩に入ったところだから、問題ないよ」

クレスクと呼ばれた背の高い方は、路地の先に人がいないか確認するため頭巾をずらした。緑色の目がキラリと光る。

「まあでも、やることはさっさとすませますか」

二人は顔を見合わせてうなずくと、コソコソ移動を開始した。

クレスク達の向かう先は、商店エリアの南、港付近の貿易商達が店を構えるエリアだ。途中、どうしても人通りが多い所が

あの旅人に出会った日は、仕事に身が入らなかった。子ども達には悪いことをした。《学術院》時代の仲間との酒をも私は已めた。学校地区からさむしい坂を下って突き当たりまで、たったこれだけの家路をとても大切に歩いた。一人で考え事に頭を埋められるからだ。私には思索をはじめると上を向くくせがあるようで、透きとおる樹の枝葉からぽっかりとのぞく雲が目に映った。少し濁ったような白だ。樹の葉は暗かった。そのとき、冷たい風がまわりをかんばしった。どうやら、雨が降るようだった。

私は見上げた先の暗闇に立ち上る煙にさと気づいて、足を速めた。空腹は変わらず訪れていた。

「ただいま」と言うと調理所からライラがちらりと顔を見せた。すうっと伸びた黒髪は珍しくおろされていた。

「あれ。早かったね」

「今日は已めにしたよ」

「それは残念。せっかくジュザイと二人きりの夜ご飯だったのに」

「こら」

「うそよ」

ライラは目を細めて笑った。

「ジュザイはどうした」

「さあ、花でもいじってるんじゃないかしら。庭で物音がしてるわ」

ライラはふっと廊下の棚上にある花瓶を見ると、調理所へ戻った。花瓶にはジュザイのいけた雪見草が純白の美しさを未だたたえ、単調な木の茶が目立つ廊下に確かな色の焦点を与えていた。冬に開花するそれを今の時期に咲かせるのは至難のことである。植物に関してはもはや彼に敵わなかった。植物は、本よりも経験の領域である。教師としては不甲斐ないが、親としては素直に嬉しかった。

ジュザイを探しに裏口から庭へ出てみると、鋏と水入り桶を脇に据え、しゃがんでバラを見つめる彼の姿があった。湿った土の匂いもした。庭は月明かりと窓から漏れ出すささやかな光に照らされていた。大きな庭ではないのだが、少しの花が遠慮がちに点々と咲いている。自然の山のようにあくまで散らして咲かすのが彼の美学なのだ。ジュザイはこちらに気の付く様子もなく不動だった。彼の、屈むときに右手の人差し指と中指を地につけて体を支える恰好がじぶんと重なってすこし可笑しかった。佇まいというのは存外に血の流れを受けるらしい。顔は私に似ず童顔だが。

私はバラに対する彼の真剣の眼差しを見て踵を返した。家の中へ入ると、ライラに呼ばれ、目の前にじゃがいもをどさりと置かれた。丁寧に布でくるまれたナイフを私に向かって差し出しながら、微笑む彼女はずるかった。

※

数歩後退りすると、すぐに背中が壁にぶつかった。石造りの壁の冷たさが、布越しに背中に伝わる。逃げ場所がないことを悟り、クラウディアの胸は絶望で塗りつぶされた。

「鬼ごっこはおしまいだ、お嬢さん。観念してさっさと飾り物全部寄越しな」

クラウディアを取り囲む三人の男のうちの一人が、にやにやと下卑た笑みを浮かべながら促す。一番背が高くて体格がよく、どうやらこの男が親分格らしいことにクラウディアは気づいていた。親分の言葉に同調するように揃って笑う子分二人。その下品な笑い方に嫌悪が募る。

「俺たちはただ金目になる物を、全部渡せって言ってるだけなんだぜ。髪飾り、耳飾り、首飾り、指輪。ああ、あとその絹のケープも。それだけおとなしく寄越してくれりゃあ、何もしねぇって言ってるんだ。随分優しい方だと思うけどなあ」

クラウディアは冷たい視線でぐるりと男たちを見回した。金品目当ての物盗りたちが、ただ高級品を奪うだけでなく、自分をからかって楽しんでいることに苛立った。

「控えなさい、無礼者。下賤の者にくれてやる物など一つもないわ。施しを欲するならば、せいぜい大通りで膝をついて物乞いでもするのね」

いくらなんでもこれは言い過ぎた——挑発的な言動に後悔した時には遅かった。男たちの笑い声が途絶え、表情から笑みが消えた。

「世間知らずの小娘が。優しくしてやりゃあ付け上がりやがって。あんたがどんなお偉いさんの娘だろうが、ここじゃ関係ねぇよ。貧民街じゃ強い者が正義だ」

先ほどまでの芝居がかった口調を捨て、親分が唸るように言った。薄闇の中で銀が煌めく。ナイフを取り出したのだ、と数秒遅れて気づいた。

「な、何よ、私をどうするつもり？」

親分がニタリと笑う。

「そうだなぁ。人身売買組織にも売りつけてやろうか」

「人身売買……!? 馬鹿な、そんなことターナでできるわけないじゃない!!」

ハッと親分が鼻で嗤う。

「馬鹿はあんただよ、お嬢さん。ターナじゃ禁止されてても、他の都市じゃあ禁止されてねぇところもある。俺たちはなぁ、そういう外の組織とのつながりがあるんだよ」

男たちが一様に嗜虐心に満ちた暗い笑みを顔に貼り付け、クラウディアに近づいてくる。

「——誰か助けて！」

「強い者が正義、か。その言葉は間違っちゃいないが、女一人をこんな大勢で脅すなんざ、格好の悪ィ正義だなァ」

クラウディアの叫びを遮って、路地裏に凛とした声が響いた。

取り囲む男たちの向こうで、建物に寄り掛かる人影が見え

今日こそは、言うんだ。今まで二百回くらい決意して、そのたびに邪魔が入ってできなかったけど、今度こそ本当の本当に。

「リリア、あのさ……」

リリアが振り向いた。背中まである金髪が、ふわりと揺れる。彼女の深い海のような青みがかった目が僕の姿を捉えた。

「シモン！」

彼女はパタパタと僕の方にかけよってきた。

「あのね、私、シモンに言いたいことがあったの」

「えっ」

これはもしかして、もしかして。期待してもいい？　体温が一気に上がった気がする。

「えっとね」

心臓がどくどくと脈を打つ。

「私、好きな人ができたの！」

「す、好きな人？」

目の前が真っ暗になる。体の熱もヒューっと一気に冷めた。嘘だろ。この展開だと、完全に彼女の好きな人は僕じゃない。

「うん！　領主様の、お孫さん！」

「そ、そっか……」

僕の心の中は、涙の雨で大洪水となった。

「で、ヘタレなシモンくんはそのまま逃げ帰ってきたってわけか」

「逃げ帰ってない！　ちゃんとリリアの話を聞いてあげた」

「はあ……」

クラスメイトのアルジャーノンが呆れたようにため息をつく。今はお昼休みだから、教室はガヤガヤしていて、こういうことを話すのにちょうどいい。

「リリアちゃんはなんて言ってたの？」

「ええと……」

僕は昨日の記憶をたぐりよせる。

「あの方はね、少し長めの赤髪が夕焼けのようで、金色がかった瞳はまるでライオンのように美しくて勇敢なの。きっと神様が気合いを入れてお造りになったに違いないわ！　私がこの前パンを届けに行った時に、窓からチラッと見えたの。あの方が私の目に映ったのは一瞬だったけど、それは永遠のように感じたのよ！」

リリアは夢みるように、歌うように言った。リリアの家はパン屋さんで、時々彼女は領主様の家にパンを配達している。

「でも、領主様の孫ってまだ十歳くらいじゃなかったっけ」

僕は十四歳、リリアは十三歳だから、僕たちよりはちょっと歳が下のはずだ。